

國學院大學學術情報リポジトリ

コメント・討議の記録(要旨)
討議の記録(平成二十二年度
國學院大學人間開発学会第二回大会公開講演会・シン
ポジウム日本の伝統文化教育の可能性--人間開発学
の基盤構築に向けて) --
(公開シンポジウム日本の伝統文化教育と人間開発学
の構築--カリキュラム開発を視野に入れて)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 直之, 成田, 信子, 藤田, 大誠, 畔上, 直樹, 櫻井, 治男, 安野, 功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001203

《討議の記録》

登壇者 太田直之 成田信子 藤田大誠 畔上直樹 櫻井治男
司会 安野 功

安野 畔上先生から、大変に貴重なコメントを頂戴しました。ありがとうございます。これから討議に入ります。畔上先生から、太田、藤田、成田先生にご質問がありました。まず、はじめに、フロアの方から、ご質問やご意見をいただき、その後にシンポジストの方々にマイクを向けていきたいと思えます。また、先ほどご講演をいただきました櫻井先生にもシンポジストとしてご登壇いただいておりますので、ご講演の内容にかかわるご質問、さらにお伺いしたいことなどがありましたら、ここで、ぜひ、フロアからの声をお聞かせいただけると有り難いのですが。どなたかお願いできませんでしょうか？

■日本の「伝統文化」のさまざまな時間スケール

柴崎 人間開発学部の柴崎(和夫)といいます。今、畔上さんが言ったことに触発されて思うんですが、「伝統文化」といったときの「伝統」というもの、さっき、鎮守の森の話をされましたが、いわゆる日本にある「わび」「さび」「みたいな話」もですね、特に平安時代の神社は、キンキラキンにかつては輝いていたし、金閣は、金箔(きんぱく)で覆われていたみたいなのと違って、それ以前に日本人がわびさびが日本の「伝統」だと思っていたものが、実は、ある意味単なる勘違いかもしれないって

いうようなことがこれまで何回もあったわけですよ。つまり伝統文化とか伝統芸能といって、あるいは武道というのも、実は「柔道」という言葉になったのはたかだか明治でありますので、伝統文化っていったいどこまでのことを言っているのか。

つまり、今年には平城京の千三百年って言ってますが、奈良時代からの話なのか、江戸時代からの話なのか、というようなことを全然抜きにして、単なる「伝統文化」っていう言葉ですべてが語られようとしちゃうのはちょっと問題がある。果たして教育者とか、こういう言葉を使う人は、どこまでそれを意識して使っているのかなっていうことは、大学に居るものとしては気を付けていかなくちやいけないと思うんですね。

今の桜の話も、うちは國學院大學ですから、文学部では古事記とか万葉集とか教えていて、そこにもたくさん桜が出てくるんですが、そのときの桜はさっきの地域性ということ言えば、どこの桜を読まれていて、それが本当に日本の伝統文化なのか。それが伝統文化だとすれば、それはどういう形で「伝統文化」になったのか、その当時でももちろん奈良に住んでない人も居たわけですから、というようなことがあるんですね。

「伝統文化」と一概に簡単に使いますけれども、そこにはさまざまな時間スケールといったものがあり、出発点が違うものが、同じように、同じものとして同列的に扱われているというのは非常に気を付けなくちゃいけないと思うんです。果たして、伝統文化とか、伝統文化と教育とかがつていうことを考えるときに、どこまでそういうことを理解しながらやらなくてはいけないと皆さま方は思っているのかな、と思いました。



■「伝統・文化」教育のコアとなるものはあるのか？

田沼 本学部の田沼(茂紀)です。今日は大変タイムリーな話題で大変面白かったんですが、やはりちょっと気になったことがあったんですね。私は教育学が専門ですので、そんな視点からお話ししたいなと思うんですが、「伝統・文化の尊重」というところは、これは私も大変理解できる場所なんです。

と言いますのは、これは個別なレベルですから、個別なレベルで「伝統・文化の尊重」という部分で考えていったらいいわけですが、それをじゃあ学校教育、そんな視点で捉えていきますとですね、そこには当然、カリキュラムの問題が起ってくるわけです。もっと具体的に言えば、学びの範囲としてのスコープとその順序整合、シークエンスですね、それがあってカリキュラムが成り立つわけですが、そうしたときに、何に寄り所を見いだすのか。

例えば、わが国の文化というわけですけども、それはですね、堺屋太一氏がよくお書きになっているような「習合思想」。やはり、聖徳太子の時代から日本はさまざまな文化を取り入れて、そのときどきものを積み上げてきた。

あるいは明治初頭の明六社の創設のころ、あの頃なども、国学派、漢学派、洋学派といろんな方たちが、覇権争いをしたわけですね。そんなことから考えていきますと、「伝統・文化の尊重」という教育をイメージしていくときに、コアとなるものがあるのか、ないのか。

つまり、個別の学習は体験的に成り立つことはあっても、それを共通のものに持っていくだけのものがあるのかっていうと

ところが、学校現場で皆さん、大変に悩まれるところだと思うんです。ややもすると、形式的に流れたり心情論に流れて順序が組み立てられるような、そういう危険性もあるんじゃないかなってことを思うわけです。

「国学」という、國學院の立場でいえば、それを擁護しなきゃいけないわけですけども、その辺が果たして、学校教育と結び付けて考えられるのかどうか、その辺、見解を伺いたいと思います。

■適応する形で変化しつつ伝わってきた「武道」

植原 健康体育学科の植原（吉朗）です。やはりあの、伝統文化というと、特に身体文化という意味では、「武道」がすぐに出てくる。そうなる、ちよつと私も、物を言わなきゃならないと思うところがあります。

さきほど「伝統」というものを、伝えられたとおりとか、それを継承するときに、ある意味、無批判とか思考停止のような形で継承していくというような話が出ました。私のつたない解釈だったかもしれませんが。

私は、それは、むしろ違うんじゃないかというふうに感じています。どうということかという、ダーウインの進化論では、生き残るのは強い者でも賢い者でもなく、変化する者のみが生き残るといふような言い方を残しています。

実は、例えば「武道」であっても、あるいは他のいろんな「伝統」といわれる文化もですね、こうやって伝わってきた、続いてきた、というのは、変化をしてきたからという部分が、抽象

的な言い方ですけど、そういう部分があるかと思うんです。実際いろんな武道でも、今行われている武道の形は昔からその形であったわけではなくて、その折々に適応する形でやっぱり変わってきている。それが生き残ってきたというか、伝わってきたことの原則だったんじゃないかと思うんです。

もう一つだけちよつと言わせてもらおうと、私剣道やっているとですけども、海外で剣道に関わることがあって、あるロシアの剣道連盟の会長がですね、もう亡くなった方ですが、ロシアにも武道的精神性があつたんだという。しかし、それはいろんなことがあつて絶えてしまったと。その方は剣道をなぜ始めたかという、剣道を通じてロシアのいわゆる武道的な精神性を蘇らせようとした、ということを知っています。

そういう意味で、形をそのまま無批判的に継承するのではなくて、何らかの変化を伴ったからこそ「伝統」になつたんじゃないか。ちよつと、かなり一足飛びですけども、そういうような解釈というのはどうなんでしょうか。先生方のお考えとしてお伺いできればと思います。

■未来に向けて何を伝えていきたいのか

夏秋 夏秋（英房）と申します。短い質問です。

教育です、未来にかかわる。先ほど畔上先生は「地域」とおっしゃいました。これはやっぱり、伝統文化は地域の中で培われてきた部分があるんだろう。そして、それを伝えるということは未来を作ることなんだという。今、植原先生が変化しているということもおっしゃいました。

ただ「当事者性」を考えてみますと、その伝統文化を担うのは、当事者である地域住民である。そしてその地域住民である当事者が、当事者として文化を担っていくときに、子どもたちの学校教育の中で、伝統文化を伝えるっていうのはいったい何なのか。カリキュラムとして伝えるっていうのは何なのか、地域の生活から切り離れたところで伝統文化はあり得ないもしするならば、じゃ、その地域住民になるということ前提にして子どもたちを育てていくのか。

子どもたちにとって果たして地域生活とは何なのか、というようなどころ。地域を生きて、地域で生きている子どもが当事者として伝統文化を担えるのか。それから将来、果たして地域住民となり得るのか。この流動性の高い日本という社会の中で、伝統文化を伝えていくというのはいったい何なのか、どういう意味があるのか、ということを私自身ずっと問いかけてきました。先生方には、未来に向けて何を伝えていきたいのか、どういふふう子どもたちの人生を考えていらっしゃるのかというのを含めて、伺いたいと思います。

特に公立学校というところは、全国に共通の、というふうなところも基盤としてあるので、その中で「地域性」の意味と、いうのを伺えますか。ちょっとそのところ大きな問題ですが、短い時間で答えていただければと思います。

■伝統文化の全体から個別具体的な「地域」の学びへ

安野 はい。じゃいくつか整理します。最初ですね、畔上先生の方から地域性の問題二つ、太田先生と藤田先生に直球で質問

がありました。あと今ですね、将来に伝えていくということも含めた地域性も含めて、「地域」ということをですね、必ず太田先生と藤田先生にはコメントいただきたいと思えます。ほかの方でも一度、マイク回しますので、まずその点について。

太田 はい。まず畔上先生からいただきましたご質問ですが、確かに歴史研究では地域史の研究というものが非常に勢いで進んできました、実際に、そういう地域研究の教育への反映というものも、割と積極的にこれまで行われてきている、というような事情があるわけです。ただ特に、歴史学と教育ということではこれまでの議論をふまえますと、具体性から入って一般になるのか、要するに地域的なことから教えていって全体のことを教えるのがいいのか。あるいは、全体を教えて具体なり地域なりに入っていくのいいのかという、どちらがいいのかっていう議論は常にありまして、まあ簡単に答えが出せる話ではない。例えば教える規模の問題もありますし、色々あるわけですよ。一応私としては、この人間開発学部のカリキュラムとしては、まずは全体というものを先に教える、最大公約的なものをまず伝えたと、その後地域、より具体的なものに入っていくというふうを考えております。

個別具体的な話になるんですが、人間開発学部では、二年生のときに、「日本の伝統文化」という科目がありまして、今年三年生でそれを発展させるような「伝統文化と生活論」という、そういう科目が配置してあります。その中で、具体的な地域、たまプラーザキャンパスはこの青葉区にあるわけですから、例えば青葉区周辺のこの地域の歴史というのはどういふものだった

たのかというようなことで、二年生でやったことの発展ですね、というようなことをやっていけたらなと考えております。ただその学生の皆さんが付いてきてくれるかどうかというのは、また別の問題になるんですが。一応その構造というか構想としては、そういうことを考えているというようなことになります。ちよつとお答えになつていかどうか分かりませんが。

あと夏秋先生からの、特に公教育における地域の伝統の在り方の問題だろうというふうには思うのですが。これも本当にすごく難しいなというふうには思ふんです。ほくもその伝統というふうには言いながら、生まれは埼玉県の所沢市という典型的な要するにベッドタウンというか、田舎から流れて来た両親がそこで暮らしているというふうな状況です。その地域の伝統というのはあつても、そこにばく自身が今までコミットしてきたような、そういう実体験としてはないわけですよ。日本中の人々が流動してゐるわけで、きちんと地域と結び付いている人も居るし、でもそうじゃない人も居るといふことを考えた場合、そこでどういふふうに伝えていけばいいのか。これは大学教育の場合と、あるいは地域と強く密着している公教育の場合で、色々とスタンスが変わってくるだろうといふふうには思ふわけですが、特にこの大学といふことで考えた場合には、いろんな経験をしてきたより多種類の人々が集まつてきていふということも含めると、やっぱり最初は一般論である程度語つていくしかないんじゃないかといふふうなことは考えております。で、先ほど言つたように、発展としての地域といふことですよね。むしろ公教育の場でそういうところの基礎をです、培つていつていただけると本当にありがたいなと、むしろ大学とい

うのはそういうものの発展の場としてあるんだといふような形を、将来的には形作つていければ非常に幸福なことなんではないかといふようなことを考えております。

■国学者における地域性、本来動態的な「伝統」概念

藤田 畔上先生からは、「国学」における〈地域性〉をどのように処理しているのか、どういふ見方しているのかという質問で、端的にお答えできればいいんですが。

あと色々な先生方のお話に関しても、基本的には私の「国学」に対する考え方をお話しすれば、お答えにならないとしても、こう考えているんだなど、いふのが言えるんですが。

〈地域性〉に関しては、「国学者」といふのは、実は有名な本居宣長とかそういった人たちだけじゃなくて、全国に数多、これは江戸時代中期以降にいて、今も、そういうふうな学問方法をやつていふ地域の人たち、あるいは郷土の歴史を研究している人たちといふのはたくさんいると思ひます。

そういった中で江戸時代から、例えば「農業」ですね、〈地域〉の農業をどういふふうに戻興して、農村〈地域〉をどのように振興していったらいいかといふことを、古典を参照しながら、その地域において地に足をつけた形でやつていた国学者（宮負定雄など）といふのが、たくさんありました。

実際にその地方の名望家といつたような形で、「国学者」たちが地域で活動するといふのも、それは近代から今に恐らくつながつていくような形であるんだと思ひます。そういう意味からも、〈地域〉において活躍できる者こそが「国学者」、「国学」

を学んだ者、というふうに言えると考えています。

それともう一つ、先ほどの太田先生の話にあった人間開発学部のカリキュラムについて。これは私から言わせれば、「国学」の考え方なんです。

〈地域〉そのものを、フォークロア(民俗)でもなんでも、そういったものがある程度強調する、或いはしてきた、というのはもちろんあると思います。ただ、そこだけの単位ではない、大きな広がりとして、「共同体」としてどういうふう考えたのか。ある程度広い地域、「国」という地域もあるかもしれない。近隣諸国を含めた文化圏とか、いろんな考え方がありますが、そういった中で、やはり「日本」という単位。これは逆に言いますと、近代以降でかなり強烈に意識されてきた「国民」という、日本の中の「国民」意識というもの。これは、もうけしからん、というのであれば、根本的に色々な制度、根本的なものが変わらなければならぬ。

そうでないのであれば、今の憲法やそういったものがある程度軸にすることであれば、やはり、その中で一種の基準となるものが今も表明されて、その中で教育をやる、ということになると思います。

そういったことから考えていきますと、その中の「國學院らしさ」と言えば、今まで國學院の百三十年ぐらいに互る歴史の中で、やはり「神道」というものが、そのコア(核)になるんではないかという、そういった「仮説」というか、「見通し」のもとに研究してきたということがあります。

それを、こういう形でやってきたんだ、という、「神道」そのものを教えるというよりも、そういう國學院がやってきた研

究をいかに今に伝えて、その妥当性をまず問うと。

それに対して、もちろん批判や細かい歴史等がありますし、畔上先生と一緒に、私も「伝統」という言葉は、実はこの学部につながる前は、極力使わないようにしていました。

それは「伝統」と言ってしまうと、のんびんだらりと金太郎飴みたいなですね、同じものがずっとあった、という印象がありますが、実はそうでないことは明らかであります。「武道」だけではなくして、「神道」も勿論そうで、神社の建物、あるいは杜、こういったものも、そういう研究等を見れば明らかなのですが。ただ、そういったものを、何かそういう「古いもの」、あるいは昔から、ある程度「日本」だとか、そういう単位では「大事なもの」とされてきたんだ、とする考え方が、形を変えてもずっと引き継がれて来ているのは何なのか。その研究を促してきたのが、実は「国学者」だと私は思っています。

ですから、「創られた伝統」、これはイギリスのエリック・ホブズボウムとかです。ね、色んな人たちが唱えてから、「古い」と思われるものも、実際は「新しい」ものが創られていたんだと、「近代において創られたんだ」という議論が、未だにある程度力を持っていると思いますが、それは当たり前の話で、調べていきますと、日々そういったものは「更新」されていく、という意味合いで、「伝統」という言葉も出てくるんですね。

博物館でも、色んな歴史的な過程を示してこうなっているんだ、という展示の考え方がありますが、そうではなくて、古いものをそのまま展示しているんだ、ずっとこれで来ましたよ、ということではもちろん無い。

そういった意味で、このダイナミックな文化、動態的なもの

が「伝統」という言葉だと考えています。

先ほどの「伝統」とか「伝統文化」という言葉を鍛え直すということについては、私はこの学部にも所属することになって腹をくくってやってみようというを思っています。

本来はあまり「伝統」だとか何だとか言わずに、色んなことを研究したいというのはあったんですが、国からも「伝統・文化」と言ってきている。国が「伝統」とか「文化」という言葉をどういう意味で使っているのか、と言ったときに、これは『広辞苑』の意味と殆ど同じで、教育基本法のコンメンタール、逐条注釈書を見ても大体そうなんです。基本的には、それに対して、ある程度いろいろな注釈を付けることによって、克服できるんではないかというふうに思っています。

そういった〈軸〉を押さえた上で、その〈地域〉の活動を、自分の拠って立つところから始める、というのが元々の「国学者」のあり方ですし、そういう考え方を、この人間開発学部でもやっていければいいんじゃないかな、というふうに考えております。ちょっと長くなりました。

■伝統的共同体の新たな変化と新たな共同体の伝統性体现

安野 はい、ありがとうございます。もしたらちょうどですね、地域からまた「伝統」の方に話がいきましましたので、櫻井先生の方からも「伝統」ということを中心にしながらも、今話を聞いていた中で、ご示唆をいただければと思います。よろしくお願いたします。

櫻井 はい、藤田先生が多くを語っていただいたように思うんですが。確かに「伝統」という言葉を私どもは、わりかしフラックに使うところがあります。宗教学研究においては、「伝統」という言葉自体がそこに価値性を持っているという観点から、あまり使わないでおこうという、そういう立場もございます。

そういう点では、この問題というのは日本の文化研究の文脈で言えば、不易と流行という問題とかかわってくるんだろうと思う次第です。確かに「伝統」ということで、私どもはこれをずっと昔のまま、しかもその昔っていうのをいつに押さえるかっていうことは、これはもうそのときどきによってかなり違っておられますから、そのままでは使いにくいかもしれないけれども、伝わってきたものという意味で、わりかし私自身も簡単に使っておるところです。

その伝わってくる中で、何が変わりそして何が変化しないのかという、そういう構造的な含めた文化というものを明らかにするという学術的な営みがあり、そういう枠組みの中で、また実際の地域において、それが生きている姿あるいはそれがこれから生きようとしている姿、そういうものを見ていくという関連性があるかと思えます。「伝統」というのはある意味で言うと、先ほど藤田先生は「更新」とおっしゃったんですが、同時にやはり「再生産」されて生きることによって伝わってきているものと思えます。

特に神社という問題につきましても、畔上先生の方から、鎮守の森について非常にショックを受けたっておっしゃいましたが、「神社」という概念そのもの自体も、時代の中で社会の受け止め方によって違ってきているところもありますし、「神

社」っていうと、それはもう伊勢の神宮から靖国神社まですべてを含むような大きな概念ですね。そういう中で、今回は特に地域に根付いている神社というところを取り上げました。それが伝統性を有するという問題について、新たに創建された神社も、地域社会において非常に重要な価値性が見いだされている、伝統あるものとして受け止められる。こういうことをちょっと感じました次第です。伝統的な共同体がかえって次々新しく変化をとげ、新しい地域コミュニティが伝統性を体現しているということでしょうか。お答えになってるかどうかわかりませんが、そういう印象を持ちましたのでお話しさせていただきました。

■実践と知識をつなげ、自分の感性を相対化する

安野 はい、ありがとうございます。「地域」にかかわる質問と、「伝統」ということの本質を考えるのはかなり近い概念だし関係あるものですから、ちよつと関連して扱ったんですけど。フロアの方で逆にですね、これについてご意見を持っていらっしゃる先生方がいらっしやったら一人か二人、もしご発言いただければとありがたいなと思いますけど、いかがでしょうか。「伝統」あるいは「地域性」の問題ですね。

もし特になければ大事な問題なんですけど、まだいくつか積み残しの質問がありますので。例えば先ほどですね、畔上先生の方からは成田先生に、桜ということに関する感性・感覚、そういうものに関わるご質問であるとか、田沼先生からは、教育課程の問題もありますので、そちらに移つてもよろしいですか？司会としては時間を考えるとありがたいんですけども。本

当は「地域」と「伝統」の問題について、突っ込んでみたいっていうか、そこだけで終わってもいいぐらいな気持ちは持つてるんですけど。これは答えが出るものではないので、櫻井先生の方でいくつか示唆をいただいたことを参考に、われわれ自身から考えていくということ、ちよつとまとめさせていただきます。次へ行きたいと思います。

じゃ成田先生、先ほどですね、ご質問への答をお願いいたします。

成田 桜のことからですけども、私が見た中学校の実践でも、古今集の時代に日本人がどういう桜を見ていたかという写真が提示されて、それはヤマザクラの写真でした。それと、今東京の子たちがよく見る桜は、ソメイヨシノだ、葉が先に出るか花が先に出るかというような話もして、そして実践で歌を詠んでいくという流れでした。

先ほどの柴崎先生の質問にも関わると思うんですけども、私を感じたのは、歌を詠んでいく、当時の知識や学術的に明らかになつていることも含めて、詠んでいくというアプローチと、それから自分が今桜についてどう感じるのかということの関連性で、無前提につなげるということではありません。

例えば比べるとかして、どうして概念が変わっていくのか、今私たちがある言葉に関して感じるイメージというのはどういうもので、さかのぼっていくといつからなのか。先ほどの話題につながると思いますけれども、それはいつからのものなのかというふうに考えていき、自分の感性をある意味で相対化する、そんな簡単に相対化できるかという問題はありますけれども、

そういうことが大事なのではないかと思いました。

感性と知識をつなげるというのは、そんなに簡単なことじゃないというのはまったくおっしゃるとおりで、ある仕掛けが必要だというその工夫の仕方、それはいただいた宿題だと思っています。少なくとも、今の自分がどう思うか、あるいは今の世の中で、さっきの桜ソングのことであれば、流行しているということは何なのかという、そこが一つの手がかりになるかなと思います。

それともう一つ、夏秋先生と田沼先生がおっしゃったことで、学校教育における伝統文化教育というのは、あり得るのかということだと思うのですが、私の考えは、学校とその地域でなされている色々なことが、まったく関係ないというか切れているということが問題だと思います。「当事者性」と夏秋先生はおっしゃいましたけれども、どこまで今の学校に当事者性があるかということが問題だと思いますし、当事者性がまったくない学校っていうのはなんなのかと、逆に思います。

ですから、「総合的な学習の時間」では、地域での学習材の開発が大事です。教材開発はすごく言われていますし、先ほどの桜の問題ともつながると思います。

何を子どもに考えさせるかというときに、地域の問題、自分が生きている生活の場面、転校を繰り返している子でも今住んでいるところですね、あるいはお母さんが言ったことやお母さんの出身地、それらがいま混ざっているということは考えなければなりません。でもそのことと切り離して教育の営みはないというふうに、私はそういう立場で考えています。以上です。



■主体的にコアとなるものを設定している先進校

安野 私司会なんですけれども、ちょっと司会を離れて、現場上がりなものですから。お手元にこんな資料を配ったんですけども、国立教育政策研究所で先進研究をやっていたところがうまくいった事例っていうのは、実は三つのことが揃っているんですね。それは何かっていうと、今、田沼先生が大変重要なお指摘をされたんですが、伝統文化教育といったときにコアになるもの、これがどこを見渡しても簡単に言えば出てこないといったときに、まず先進校はですね、そのことを自校の狙いとしてきちんと主体的に設定をしているという、自分の学校で狙いを設定したんだというですね、主体的にまず狙いの設定をした学校はうまくいっている。

二つ目ですね、それを学校だけではなくて、後半に書いてある東広島市とか島田市とかある程度まとまった市町村とかっていう地域の中で、今度は教育委員会も含めて考えて、こういうことやっていくんだという価値的部分を、行政も交えてやっていく。これもうまくいっているんですね。

そして三つ目は、これを進めるためには、積み上げ方式というですね、簡単に言えば上から何をやるんだって決めて全部下におろすという発想じゃなくて、それはやっておくんですけど、実際に各教科とかあるいは色々な教育活動で何ができるのかっていうことを、逆に下から積み上げていって、上からの設定と下でやることとの調和を図る。現場で〇〇教育と呼ばれているものの多くは失敗してらるんですね。うまくいっているのは、環境教育なんですけど、なぜ環境教育がうまくいっているかという

と、ある程度環境教育は世界的にコンセンサスが得られてますので、「あーこういうとこ目指せばいいんだ」というのが上からおろせばできるんですね。だけど他の〇〇教育、命を大切にしている教育とかあるんですけど、じゃ命を大切にしている教育ってね、コアは何なんだっていうのがないんですね。だからやっぱりそれを一つの学校課題・地域課題として、自分たちで設定していくしかないというアプローチがあるんですね。たぶん伝統文化教育も今のところは、少なくとも実践校からは、自分たちで狙いを設定していくというアプローチと、具体的にできるものを下から積み上げるという、両方の調和の中からその姿を作っていくという、現在進行形ではないかなということしかちょっと今は言えないですね。

時間の関係ですすね、今出た課題をさらに広げるとはちょっとできませんので、フロアの方から、伝統とか文化とか地域性とか、言葉と感性の問題、教育課程の問題等々で、何かご意見なりご指摘をいただける先生がいらっしゃいますでしょうか。

■「伝統」を求める「集団の生き物」としての人間

加藤 加藤 (季夫) です。生物やってる立場からですね、普段「伝統」というのは、扱ってるのは生物ですから、生物には「伝統」ありませんので、あんまり深く考えなかつたんですが、今日のお話を聞いてですね、なかなか面白い分野というのがよく分かりました。

どうして「伝統」というのが人間に出てくるかっていうと、

おそらく、今ふと考えたことなんですけど、人間は「集団の生き物」だということで、どっかに帰属意識なり何なりをですね、現在・未来そして過去に求めたいから「伝統」という概念が出てくるんだろうという認識を持っています。

人間はですね、チンパンジーと共通の祖先がいましたから、チンパンジーは「集団の生き物」ですけれども、もしオランウータンと共通の祖先だったら、おそらく「伝統」という概念は出てこなかったんだろうという感じがして、なかなか「伝統」というのは奥が深いなということで、自分自身も少し考えてみたいと思います。きょうは先生方に良いご指摘あるいは抱負をいただいで非常に感謝しております。

■地域生活に取り込まれた伝統文化の価値をどう伝えるか

安野 ありがとうございます。もう何人か声を聞かせていただけるとありがたいなと思いますけど、いかがでしょうか。司会としては、あと三人ぐらいもらって五分ぐらいで終わりたいなとあと思ってるんです。はい、お願いします。

寺本 寺本（貴啓）です。今日はありがとうございます。私も「伝統文化」に関してはまったく分かってなかったものから、今回結構勉強になりました。

これまでの学校におけるっていう意味でちょっと話をしたいんですけども、伝統文化っていったら、昔はこういうことありましたよって言って伝えるというようなものが結構多いんじゃないかなと今のところ思っています。

つまり、教えることでそれで伝統、昔はこういうことありましたよということを伝えるっていうような、イメージだけだったんじゃないかなというように思ったりしています。

ただ、伝統文化本来は、なんていうんですかね、教えて伝わってるんじゃないかって、生活の中に取り込まれるものが、その地域の中で教え合って、結果的に伝わってるというようなことじゃないかなと思ったりしています。なので、じゃあ学校ってどういう役割なのかなっていうことになる、地域の方に寄り添って、これ地方の伝統文化の話ですけれども、その場合に関しては、学校は寄り添っていかないと、結局はただの知識の伝達だけじゃないかなというように思ったりしています。

もう一つ、伝統文化がただ伝えるだけだったら、「あーそうですか」っていうことになってしまいますので、学習者が、本来伝統文化に存在している価値を理解するかどうかということが、非常に重要になってくると思うんですね。

そのときに例えばですね、漆塗りのお箸を作る伝統があったとしましょう。こういうものを作りますよということを伝えるだけではなくて、その人が例えばどういう工夫をして、どういうふうに頑張ってるのかとか、時間をかけてどれだけ伝統を伝えるために工夫してやっているのか。または日本の材料を使って日本の技術を使って、どういうふうにやっているのかっていうことも含めて、「あーこういうようなものがあるんだ」ということが分かって初めて、そういう価値っていうものが見えてくるんじゃないかなと。ただこういうのを作りますよとか、これもありますよっていうことだけじゃなくて、そういう人間の生き方っていうものと絡めていかないと、その伝統文化

の価値というか、教育的価値というものがないんじゃないかなというように、感想として今日聞いていて思いました。以上です。

■子どもたちにとって欠かせない「文化の創造」

柴田 人間開発学部の柴田(保之)と申します。ぼくは成田先生が言われた、「文化の創造」があるところですが、大きな話はいろいろ議論があると思うんですが、教育の教室で行われていることを最後にどこで評価するかというときに、その辺をきちんと伝えられているかどうかがあるとしても大事だと思うんですね。その「当事者性」も含めて、そのときに生徒が文化を創造しているならば、その時は当事者なので。

そういうところが抜けるというのが教育においては致命的なところで、「大きな伝統」の話はこれからもずっといろんな議論がされていくだろうし、どこかに地域の問題もたどり着く様々な結論があるんですけど、教室でやられていることは、それがやっぱり子どもにとって常に文化の創造じゃなければ、どんなことやっても空振りに終わるんじゃないかと思うんです。

その辺が、なんだかとても大事な指摘をいただきましたような気がしたもので、ちょっとそれを言いたくなりました。伝統にかかわらないときにでもですね、そこから文化はいつも創り続けているので、仮に伝統というのがなくても、文化はいつも目の前にあるもので、文化の創造はするものですから。その成田先生の言われたようなところが、教育って観点では絶対落としたくないことなのかと思います。

終わりにさせていただきます。

■「伝統にとらわれる」ということの意味

近藤 近藤(良彦)です。きょうの話を聞かせていただいて、「伝統にとらわれる」というふうな、批判して言っている意味ではなくて、そういうことをちょっと考えてしまいました。

私、物理学をやっているんですが、実は物理学にも伝統的な方法というのがあって、その伝統的な方法によってかなり色々なことが分かって、色々なことが発見されています。

しかし、革命的とかあるいは非常に新しい大発見は、むしろその伝統的なものにとらわれないところから生まれてくることがあるんです。しかし、じゃあ伝統文化というのがどういふときに必要になるのかっていうと、私自身は伝統文化から自由になっってしまった人が、本当は伝統文化が必要な人じゃないのかなというふうに、今日の話聞いて思いました。

安野 はい、ありがとうございます。時間が大変迫っていますので、ゆっくりしたまとめできないんですけども、今日いただいた大変貴重なご意見の中から、今後は我々が國學院大学の伝統文化教育というものの具体的な形を作って、ある程度カリキュラムというところに整理をするという使命を帯びております。その場合にですね、忘れてはならない根幹的なこと、そもそも國學院という「伝統文化」って何なのかという概念規定をまずしっかりしながら、さらにこれが人間育成、指導者育成としての役目を持つる学部として、どういう人間作り人作りにつながるっていく教育をやるのかという、本来の教育的な価値もやっぱりきちっとおさえなきゃいかんだろうと思います。

さらにその上で、我々は伝統文化関係の科目とこのをちよつと狭くとらえすぎたなど、もうちよつと学部そのものの全体にも関わってくるなという感じでした。特に我々は文科系理系なんて言い言っちゃうんですね、これはもしかしたら文化創造という意味では、理系もすべて関わってくるんでしょね。まさにですね、それが教育系の学部という、大きなコアの中の一つの核になるというようなことになるんだろうと思います。こうしたものを我々がしつかり受け止めて、できるだけ具体的な形でまた色々な先生方からご示唆をいただくことがですね、まさに人間開発学の一つ一つを積み上げていくことにつながっていくんだろうと。それを人間開発学研究の中でさらに反映させていくことをですね、先生方にお伝えをして、シンポジウムの方を閉じさせていただきたいと思いません。

シンポジストの皆さんに拍手をいただければと思います。(拍手)では、司会を藤田先生に返しますので、宜しいでしょうか。

■國學院大學伝統文化リサーチセンターの活動

藤田 最後に、共催の國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンターで、「國學院の学術資産に見るモノと心」プロジェクトの担当をしていらつしやる、研究開発推進機構准教授の遠藤潤先生からお話をいただき、その後人間開発学部副学部長の一正孝先生よりお話をいただいて、この会を閉じたいと思います。それでは宜しく願います。

遠藤 こんにちは、伝統文化リサーチセンターの遠藤(潤)と

申します。本来であれば、センター長である杉山林継先生がこちらで御挨拶をするはずなんですけれども、公用がありまして、私の方で代わりに僭越ながら簡単なお話をさせていただきます。本日は講演会・シンポジウム、どうもありがとうございます。パネラーの皆さま、とりわけ櫻井先生と畔上先生におかれましては、國學院大學まで足をお運びいただき貴重なお話をいただきましてどうもありがとうございます。

私どもの機関は伝統文化リサーチセンターということで、今回の講演シンポジウムのタイトルとばかりそのものという名前が付いている機関でございまして、一言ご説明だけさせていただきます。

伝統文化リサーチセンターというのは、文部科学省のオープン・リサーチ・センター整備事業の助成を受けて、本学で平成十九年度から展開している「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」という事業を実施している機関です。これは学外の研究者の方や地域の方と交流をしながら研究事業を進めて、広くその成果を公開していくというもので、本学の中で一番目立つところでは、渋谷の図書館のある建物の地下一階にございます、伝統文化リサーチセンター資料館で具体的な展示をしております。ここは博物館としてやっているだけではなくて、背後で日常的な研究活動をして、それを成果として出す。ですから通常の博物館に比べると、研究をしながら常に展示を回転させていく、次々変えながら研究成果を発揮していくということをしております。今回のシンポジウムでも、非常にいろんなことで勉強になりました。特にキーワードとして、「地域」ということと、それから「伝統」という言葉がそれぞれ出てまいりましたけれども、

地域という点に關しましては、私どものセンターでもいかに地域の方々に親しんでいただくか、あるいは研究成果をどのような形で公開するかということを様々考えております。

渋谷区と連携をしながら研究成果を公開しておりますが、小学生を対象としたワークショップ等も行っているんですが、とりわけ櫻井先生の地域での取り組みをお伺いして、まだまだ私どももやることがあるな、というふうに考えた次第です。

「伝統」ということを巡りましては、やはり私ども日々研究や展示をする中で、いろいろ考えていることがございますけれども、これまでの活動の中で、何人かのスタッフの中で話が出たところでは、「伝統」というものを取り上げていくときに、なんで続いてきたのだろうかということが疑問形で取り上げられる。なぜ続いてきたのかと考えるときに、今日の議論の中でも出てまいりましたけれども、形であるとか形式といったものが踏まえられないということ。あるいは形を学ぶということで、継承されていくということはどういうことなんだろうか。その中に変化も含まれてしまう。そういう考えを持ちながら、いろいろ展示を工夫しながらやってきております。今日の議論の中でも改めて、自分たちがやってる活動も見直せたというようなことでございました。

ご来場の皆さまも、今日は長時間にわたり、このシンポジウムにいらっしやっていたくださりありがとうございます。これからも人間開発学部はもちろんのこと、私どもの伝統文化リサーチセンターについても、ご支援賜りますよう、よろしくお願ひします。拙いですが、これでごあいさつにかえさせていただきます。ありがとうございます。

■人間開発学の「将来のビジョン」に向けて

藤田 では最後に、人間開発学部の副学部長である、一正孝先生よりお話しをいただきます。

一 一(正孝)でございます。どうも皆さまありがとうございます。人間開発学部はスタートしまして二年目でございます。学生も今年生、二年生だけでございます。同時に人間開発学会というものを昨年度より発足いたしました。本年度は二回目でございます。今日はですね、学生さんもこの場に来てくれておりまして、非常にありがたいなということでございます。

まとめは安野先生がしてくださいましたので、それに屋上屋を重ねるようなことはまずいかなと思えますが、私なりに三点の問題提起をされたかなというふうに受けとめております。

第一番目は、「学際性」ということでございます。私ども学部を立ち上げたときですね、いろんな分野のものが携わってききました。ですから、今日のこの学会大会を見ましても、「日本の伝統文化」というテーマに關しても、ある一定の分野の方だけであれば、まったく違う展開があったんじゃないかと思えますが、先ほどフロアから、自然科学系の先生方からのいろんなご発言がありました。やはりこれからですね、この「学際性」ということを活かして、この「人間開発学」というのは、ますます質的にも向上していく必要がある。また、そこにいる人間もですね、学生、また教員・スタッフも、そのことを肝に銘じていく必要があるんじゃないかなということでございます。

二点目は、それに関連しまして、これは私が若いときに言い聞かせていたことですけれども、「無知の知」ということです。自分がいかに知らないかということを知ることによって、そこから何を学んだらいいのかということが、たぶん出てくるんじゃないかということ、参加させていただいて学ぶことができたように思います。また課題をちょうだいしたかと思えます。

最後に三点目でございますけれども、これは伝統文化というのを、ちょっと視点を變えて、「歴史」というようなことで、ちょっと見させていただきました。「歴史とは何か」という本で、E・H・カーという人がですね「歴史とは過去と現在の対話である」というようなこと言っております、私はこの言葉に若いころ衝撃を受けました。私自身はそれに付け加えて、過去と現在の対話であると同時に、「将来のビジョン」というものにつながっていくんだと。だから昨年一回目、今年二回目の学会大会を行いましたけれども、それを今後につなげていくというのが、私たちの役目、使命じゃないかと。

「人間開発学」という日本では珍しい言葉を使った学部でございます。そういう面では、私たちがこれからどういうことを、学会としても学部としてもやっていくか、というのが問われているんじゃないかなということでございます。

ちよつと視点がずれたかと思いますが、本当に今日はいろいろな先生方に来ていただき、また伝統文化リサーチセンター、教育開発推進機構も共催してくださいました。この二つのところでは、色々な下支えをしていただき、本当に感謝しております。今後ともよろしく願いたいと思います。

本当に最後になりましたけれども、遠くからお越しください

ました櫻井先生、本当に感謝申し上げます。また畔上先生、発題者に対しての貴重なコメントを頂戴しました。今後ともよろしく人間開発学部あるいは人間開発学会を見守っていただきたいと思っております。

以上で挨拶に代えさせていただきますと思います。ありがとうございます。

■学際的な人材を育成してきた國學院の「伝統」継承を

藤田 司会進行が最後にしゃべるのも変なんです、このポスターを今回作りました。これは手製なんですけれども、ここに写っている先生が、私が紹介した國學院一期生の三矢重松という先生です。この人は国語から歴史、剣道もやっている。そういったいろんな意味で、文武共に総合的な優れた人格の方だと思いますが、こういった方が國學院卒業生である。

あるいは高橋龍雄という人は、國學院と慶應の先生をやっていた人ですが、その人も英語教育から、国語・国文それから茶道でも有名な方です。この人も國學院の出身です。

「学際性」というお話が出ましたけれども、まさにそういった人間を輩出してきたのが本学の歴史、それこそ「伝統」だと思います。

今日、自然科学の先生からも色々なお話をいただいて、正直狙い通りであったとともに感動をいたしております。江戸時代も渋川春海という、算術をやって暦を作った人が、垂加神道という神道の信奉者でもあった、ということもあります。

色々な、そういった歴史的なことを踏まえつつ、今どうい

